日本道徳教育学会　神奈川支部研究大会2020

12月26日(土)

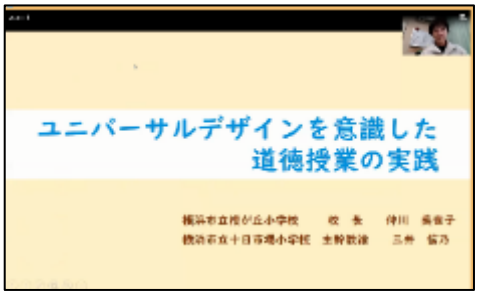
２０２０年を締めくくる神奈川支部の全国大会でした。今回も６０名近くの先生方にご参加いただきました。ありがとうございました。

提案①

ユニバーサルデザインを意識した道徳授業の実践

横浜市立榎が丘小学校　　校長　　仲川　美世子先生
横浜市立十日市場小学校　主幹教諭　三井　信乃先生

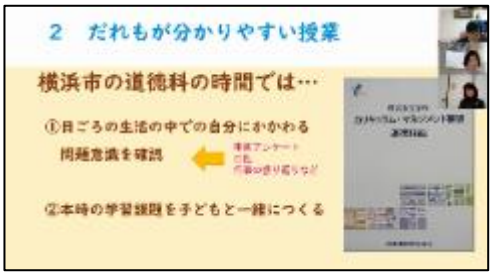
仲川先生より～横浜市の道徳実践について～



道徳の授業の目的

・何のための道徳授業かの理解→自分にとってよりよく生きるため
・生き方を見つめなおす。否定ではなく、受け入れる事
・安心して心の内を出せる雰囲気づくり

横浜市の道徳科実践より



〇あらすじの理解　読む際の視点を与える。
〇視点に合わせた第一発問➡誰もが安心して参加できる。
〇構造的な板書で挿絵を入れたり児童の意見をまとめたりする。
〇発言する際に発言がつながるように意識する。
〇教師の共感で受け止める。➡発言しやすい雰囲気をつくる。
〇子どもの意見から、本時で迫りたい価値を強調する。
〇子どもたちの言葉を使ってまとめて、価値を深める実践意欲を高める。
〇カードを出す、　色を塗る、手を上げるなどをして自分の心と生活の様子を振り返る
〇自分の日常に戻って振り返る。

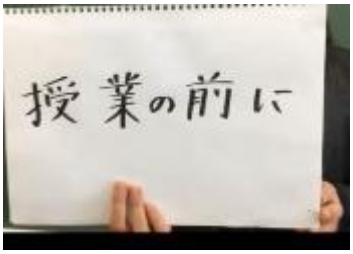
○終末では無理に教師が押し付けるのではなくのではなく子どもたちが自然にやってみたいなと思うまとめ方を意識する。

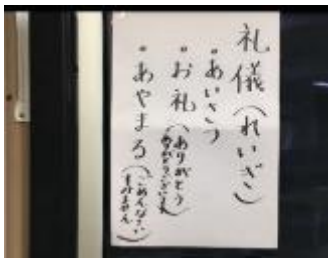
☆横浜市の道徳実践には今回の学習会のテーマであるUDの考え方と共通する部分が多く見られました。

三井先生より～模擬授業による授業提案～

教材名「ありがとうの言葉」（東京書籍　4年）

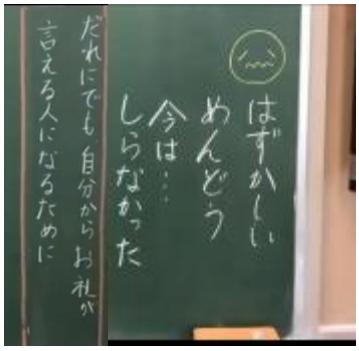
特別支援学級での実践を今回模擬授業で提案していただきました。





○教材を理解するために授業前に…

・宿題として事前に教材にふれる。
・テーマについての日記を書く。
・朝の会で話をする。
・掲示物などで意識できる環境づくりをする。



○子どもが自分の心の弱さに気付くための質問

「すぐに素直に謝ることが言えない時ってあるよね？」
「どうしてだろうね」
・すぐに感情が出てくるようにサイドボードにイラストを描く。
・子どもによって意見が言いにくい場合は第三者として聴いてみる。
「すぐ謝れない子もたまにいるよね？なんでだろうね？」

○このマイナスの感情を乗り越えるために…

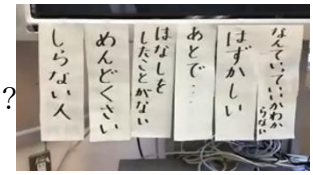
・読みの視点　登場人物話の内容を伝えておく。

○教科書ではなく挿絵による説明

　ひろし君はお小遣いをもらった時にお礼が言えなかった。
→知り合いのおじさんに帽子を拾ってもらった時お礼が言えなかった。
→おばあちゃんのお礼の手紙を見て「ありがとう（有難う）」の意味を知る。
→ひろし君は考え、最後に素直にお礼をいうことができた。
　のようにストーリーを挿絵で視覚的に説明するようにした。

○子どもの中にある「真実」に迫る発問

教師…お小遣いをもらったのにお礼を言えなかったのはなんでだと思う？
児童…家族だし面倒だし、恥ずかしい
教師…こんなひろしがなんで佐々木さんの家にお礼を言いに行こうと思ったのかな？
☆意見を言う事や考えをまとめる事が苦手な児童を支援するための様々な手立て



○学習のまとめ方の工夫

Q今日の勉強で大切なことは何ですか

・１５分間　自分自身振り返る時間を設ける。

・思い出すことが難しい場合は役割演技を取り入れる。

・今の自分の気持ちに近い部分ネームカードを貼る。

・「伝える」「ありがとう」となどキーワードを強調する。

・板書を左上がりにすることで気持ちの変化を視覚的にとらえる。

・掲示物の色わけをする。

・余計な視覚情報を与えないように絵をトリミングする。

○提案者の考えるUDとは？

・子どもの実態に合わせて授業を変化させていくことが大切である。

・何でも教師が準備しておくのがよいわけではない。

・今回の提案も様々な授業形態の一つの形である。

・他にも色々なやり方を模索していくことが大切である。

【質疑応答】

Q実際に授業をやった時のクラスの様子を教えていただきたい。

A特別支援学級（情緒級）の５人の子どもたち（４・５年生）との授業を今回の模擬授業では再現した。

Q再現構成法による提案で、臨場感をもち実際に授業を受けているように引き込まれた。
特別支援級の子どもたちの授業での反応はどのようなものだったか？

A継続して授業を取り組んでいたので、どのように授業をしていくか、見通しをもって授業に取り組むことができていた。その時の子どもの気持ちが大切であり、気持ちにそって取り組めた授業だったと感じている。一人ひとりの言葉がけが重要だと強く感じた。

Q本時の課題が「自分からお礼が言える人になるために…」　課題の語尾に空白を残したのは何故か？
「自分からお礼を言うために大切なこと」という言い切りの課題にしても良かったのではないか？

A「…」のあとにどんな考えを付け加えたらいいか、子どもたちが考えていけるように敢えて空白にしている。子どもたちと授業の中で、いつもこのような型の課題の提示をしていたので子どもたちはその意図をきちんと汲み取っていたように感じる。
「…」は広がりをもたせるための意図である。発問の形もどんな意図であるかが大切だと感じた。

Q導入の際、心のマイナス面を子どもたちに聞いていたが、逆のパターン、プラスを聞くパターンもあるのか？マイナス面は高学年からは出にくいのではないか

A「人にお礼を言うこと」の大切さ自体は、子どもたちはもともと分かっているので、あえてマイナスの部分を聞き、それを乗り越えることのよさをねらっているため、このような形にしている。
子どもの実態にもよる。マイナスが出る時もあれば出ない時もある。そのような時は自分事ではなく「別の人だったら」と他者に置き換えて考えさせている。

Q板書に色が多すぎるので、「吹き出しの色」などをもう少し精選した方がよかったのではないか？
Aいつも「吹き出しの色」をこのようにしていたわけではないが、吹き出しはよいことは明るい色、話し手が違うことを意識するために今回色を変えた。イラストの大きさや、必要のない挿絵を精選していく必要があると感じる。キーワード「ありがとう」が黒板のいろいろなところに出すぎてしまっているので精選していく必要がある。

Q別のアプローチとして場面に応じて、画用紙に書かれた「言葉」を選択するようなやり方もあるのでは？「場面絵の切り取り」だけでなく「日常生活の写真」なども使ってみることも有効ではないか？
何故そのカードを選んだかを話し合うことによって新しい授業展開も考えられそうである。
支援級のお子さんに主体性をもたせことは、通常級でも通じることがある。他にどんな方法があるか？

A気をつけている事として「実際に言っている言葉はふきだし」
「考えていることは雲形のふきだし」にして違いを意識できるようにしている。

Qどのように子どもたちを見取っているかポイントがあれば教えてほしい。
A・マグネットを貼る。
・ひと事日記
・学級の「何でもノート」に書いている内容を振り返る

Q礼儀とは「心」と「形（行動)」が一致した美しさ、言葉だけでもいけなないが、心では思っていても行動できない事もある。両方セットで考えていくことが大切でないか？
「どんな心でありがとうというのか」それに迫るような発問はあったか？
A授業の中で子どもから「ただ『ありがとう』と言えばいいの？」と問い返すと「目を見る」「心を込める」などの意見も出ていた。

☆今回の研究大会では山口市立良城小学校　坂本哲彦先生に「ユニバーサルデザインによる道徳授業の実践」のご講演をいただきました。
神奈川支部の提案についても様々な価値づけをしていただき大変貴重な時間となりましたありがとうございました。

お礼の言葉（木村理事）

道徳科のＵＤは全ての教科に当てはまる、大きな理念だと改めて実感した。
「全員参加、分かる授業をすること」「誰もが参加できる　心情・行動・周りの人に関わる発問」
「道徳のねらいや捉え方」など大変勉強になった。

閉会の言葉（富岡理事）

例年と異なり、オンラインで全国大会を実現するまでに、いろいろな先生方の協力があった。
しかし今回新しい知見を得ることができた。現場の先生は実践家（臨床心理学者）として、エビデンスを検証する視点も今後取り入れていくことが大切ではないか。
教科教育学としての視点をもちながら、振り返り議論していくと、「道徳教育学」としてのあり方も見えてくるのではないか。
来年は、対面で大会ができればと期待している。明るい見通しをもって取り組めるようにしていきたい。

今年もありがとうございました2021年も様々な学習会で皆様にお会いできることを楽しみにしております。